

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

宮城県

○学校名

角田市立横倉小学校

○学校のURL

<http://www.kakuda-c.ed.jp/yokokura-es>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各1学級、【特別支援学級】4学級、【合計】10学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】183人（平成27年11月1日現在）
（内訳：1年生30人、2年生29人、3年生33人、
4年生33人、5年生35人、6年生23人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

特になし

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

自ら学び、人と豊かにかかわりながら、心と体と知性をみがく児童を育成する。

【人権教育に関する目標】

心を働かせて他者を理解し、思いやりをもって行動する子どもを育てる。

○人権教育に係る取組一口メモ

肢体不自由の障害がある児童との触れ合い活動をとおした認め合いや共に生きようとする態度の育成を図る取組

○人権教育にかかる取組の全体概要

上記の「人権教育に関する目標」に基づき、

<努力事項>

- ・ 福祉体験、交流学习、ボランティア活動の推進
- ・ 思いやりや奉仕の精神の育成

<重点実践事項>

- ・ 交流学习の充実

船岡支援学校…年2回

「聖母の家」（特別養護老人ホーム）…年1回

3. 特色ある実践事例の内容

【船岡支援学校との交流】

＜横倉小学校、船岡支援学校＞

- (1) 横倉小学校…… 学区内の人口増加に伴い、昭和49年4月に角田市立角田小学校横倉分校から独立した。早くから特別支援学級を開設し、現在、知的、自閉症・情緒、肢体不自由、病弱・身体虚弱の障害がある児童が在籍している。
- (2) 船岡支援学校… 昭和42年4月開校。角田市に隣接する柴田町にあり、主に、重度の肢体不自由の障害がある児童生徒が在籍している。

＜交流の歴史＞

交流は昭和52年から始まった。開始期数年間の記録を下に示した。現在、交流会は年に2回実施しているが、開始期当時は、本校のプールに支援学校の小学部児童だけでなく中学部の生徒を招いたり（「プール開放」）、会場を柴田町にある野外レクリエーション施設「太陽の村」にしたりするなど、交流を深めるための工夫が見られる。

昭和42年	4月	宮城県船岡養護学校（当時）	開校
49年	4月	角田市立横倉小学校	角田小学校から独立開校
52年	7月 8日	第1回交流会実施	
		（於 船岡養護学校	本校の5、6年生が訪問）
	10月 7日	第2回交流会	
		（於 横倉小学校	船岡養護学校児童22名が来校）
	10月29日	第3回交流会	
		（於 船岡養護学校	本校の5、6年生が訪問）
53年	7月 6日	第4回交流会	
		（於 船岡養護学校	本校の4、5、6年生が訪問）
	7月12日	船岡養護学校小学部児童を本校プールに招待	
	7月13日	同	中学部生徒にプール開放
	10月 5日	第5回交流会	
		（於 柴田町「太陽の村」	本校の5、6年生が参加）
	28日	船岡養護学校祭に本校5、6年生が招待される	
54年	6月28日	第6回交流会（於 横倉小学校	*この回から横倉小 会場の際は、全児童参加）
	7月13日	船岡養護学校中学部生徒にプール開放	
	10月 2日	第7回交流会	
		（於 船岡養護学校	本校の5、6年生が訪問）
	11月 2日	船岡養護学校祭に本校5、6年生が招待される	
55年	6月28日	第8回交流会（於 横倉小学校）	
	7月14日	船岡養護学校中学部生徒にプール開放	
	10月 4日	第9回交流会	
		（於 船岡養護学校	本校の5、6年生が訪問）

昭和56年以降は年2回の開催となり、現在に至っている。昭和52年の第1回

以来、平成27年度まで38年間にわたって交流を継続している。交流会だけを数えると、今年度で43回の実施となる。

<交流会の内容>

上記の通り、現在、交流会は年2回の開催である。

(1) 第1回 (6月 於 横倉小学校)

下記のとおり2部で構成されている。

① 第1部…… 支援学校児童と本校の全校児童が参加する。主な内容は、歓迎の全校合唱や横倉小学校の学級紹介、そして、支援学校の児童一人一人の自己紹介である。

② 第2部…… 支援学校児童と本校の3、4年生と特別支援学級の児童全員が参加する。特に、3年生は、例年、総合的な学習のテーマの一つである福祉の学習をする機会として、また、特別支援学級の児童はより広く交流を持たせる機会としてとらえている。

主な内容は、参加者全員でのダンスやゲーム、プレゼント贈呈である。

(2) 第2回 (11月 於 船岡支援学校)

支援学校での交流会も2部で構成されている。どちらも支援学校小学部全員と本校の6年生全員及び特別支援学級全員が参加する。

① 第1部…… 主な内容は、支援学校児童の自己紹介を含めた歓迎の言葉、支援学校と横倉小学校の児童全員で歌う全体合唱と「横小ソーラン」の踊り、支援学校児童の案内による校舎案内である。

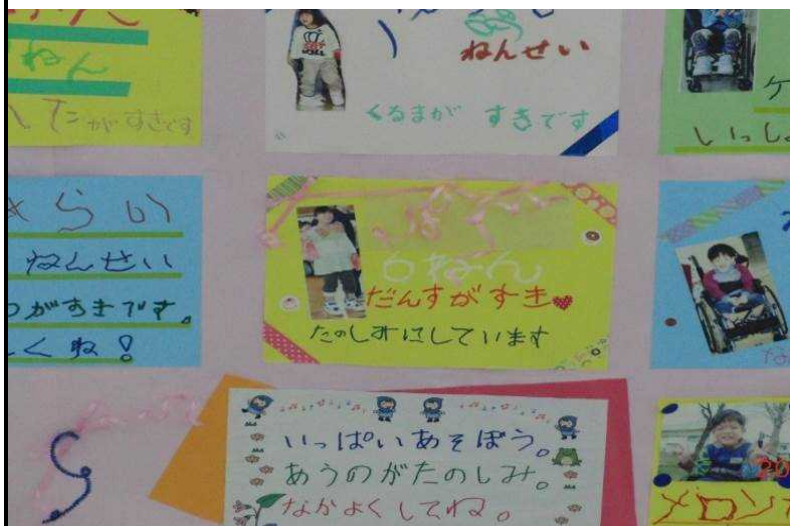
② 第2部…… 主な内容は、横倉小学校6年生による合唱、感想発表、プレゼント贈呈である。

<交流会の様子(平成27年度)>

第1回 平成27年6月24日 2～3校時 (於 横倉小学校 体育館)

交流会を20日後に控えた6月4日。船岡支援学校から手紙(「横倉小学校のみなさんへ」)と「児童実態表」が届いた。

(1)「招待状」と「児童実態表」



① 手紙(「横倉小学校のみなさんへ」)

手紙(「横倉小学校のみなさんへ」)は模造紙を何枚か貼り合わせた大きな用紙である。これが階段の踊り場一杯に貼り出されると、多くの児童が集まってきた。

そこには、来校する支援学校小学部児童一人一人の

名前と写真があり、脇には自己紹介が記されていた。自己紹介とは言っても「おえかきだいすき よろしくね。」「うたうのがすきです。」「いっぱいあそぼう。あうのがたのしみ。」の一言である。しかし、自筆である。その文字を目にするだけでも、一人一人が心を込め、時間を掛け、精一杯書いている様子が浮かんでくる。

集まった児童は、静かに見入っていた。写真の中には、前に一緒にゲームをして楽しんだ何人かの小学部児童がいる。そのときの様子を思い出したA児が叫んだ。

「あっ、〇〇ちゃんだ。去年は△△△をして遊んだよ。早く会いたいな。」

このようにして、児童はこれまでの交流を思い起こすとともに、交流会への期待を高めていった。

③ 「児童実態表」

下記のように、四つの観点に基づいた児童一人一人の実態と指導上の留意点が示されたものである。

(a) 「移動手段やコミュニケーション手段」

(例) 自力歩行（体調により自走用車椅子）友達との交流や集団の楽しい雰囲気を好む。楽しいときは喃語を発したりはしゃいだりする。
発声は難しいが、身振りや指さし等で積極的に人に関わろうとする。

(b) 「かかわり方のポイント」

(例) じっとしているのが苦手で体や腕を動かしながら活動する。
余り制限しないでほしい。できるだけ見えるところから声を掛けてほしい。意思表示のほとんどは、まばたきやうなずきのため、表情や様子を見て対応してほしい。

(c) 「じゃんけんの仕方」

(例) 教師と一緒にじゃんけんカードを使用。勝ち負けは理解できない。
自分の言葉と指でできるが、相手と同じものを出してしまう。

(d) 「特に配慮を要する内容」

(例) 左手を振り上げるような動作(発作)が見られることがある。
親と離れ寄宿舎で生活しているので、できるなら家族の話より学校や好きな物などについての話をしてほしい。

これを踏まえ、全職員で来校児童の実態と対応する上での留意点を確認するとともに、本校児童にどのような児童が参加するか、特別視などせずどのように接すればよいかなどについての事前指導をした。

(2) 交流会

① 第1部（2校時）支援学校小学部児童と全校児童参加（進行：JRC 委員）
（支援学校児童入場 ※6年生と手をつなぎながらの入場 花のアーチは3年生）

- 1 始めのことば（JRC 委員）
- 2 全体合唱（「世界中の子どもたちが」）
- 3 歓迎のあいさつ（横倉小学校長）
- 4 横倉小学校紹介（各学年）
- 5 船岡支援学校児童 自己紹介
- 6 船岡支援学校校長から
- 7 1・2・5・6年生退場

※ 6年生は2回目の交流会があるので支援学校児童と握手をしてから退場)



＜6年生の児童と一緒に
支援学校児童が入場
(花のアーチは3年生)＞

「□□君は大切なお客さんだよ。花
のアーチは喜んでもらえたかな。」

＜全体合唱
「世界中の子どもたちが」＞

「手話なら耳が不自由でも分かった
と思って、一生懸命に練習したよ。」



✓ 第2部（3校時）支援学校小学部児童と3・4年生、特別支援学級児童参加
(進行：横倉小学校3年生)

- 1 みんなでダンス（支援学校担当）「おどるポンポコリン」
- 2 ゲーム「じゃんけん列車」（2回）（横倉小学校担当）
- 3 感想発表
(支援学校児童2名、横倉小学校3・4年、特別支援学級児童各1名)
- 4 プレゼント贈呈
(1) 特別支援学級から（手作りのうちわ）
(2) 3・4年生から（手作りの独楽と風車）
- 5 終わりのことば（横倉小学校4年生）
(支援学校児童 退場 ※花のアーチは3年生)



＜「じゃんけん列車」＞

「〇〇さんは、じゃんけん
で負けちゃいました。この黄色の
輪でつながります。」



〈二人の特別支援学級の児童と〉

「△△君、今度はあっちのグループに行ってみよう。」

〈肢体不自由学級の児童と〉

「バン、バーン！ぼくは、二丁拳銃で戦うんだ！」



3、4年生は、車椅子を押したり手を引いたりして、支援学校児童一人一人を「じゃんけん列車」の列に入れ、一緒にゲームを楽しんでいた。どの児童にも、特別な扱いなどせず、一緒に楽しもうとする姿が見られた。特に、1部と2部との間に10分間程度の休憩時間を設けたのであるが、その時間に会場のあちこちで、支援学校の児童と本校の児童が自然におしゃべりをし合い、また、本校の児童が車椅子を押して声を掛けながら自由に移動する姿も見られ、交流の深まりを感じた。

特別支援学級の児童は、どちらかと言えば、通常学級の中で声を掛けてもらう場面が多い。しかし、この交流会では、上の写真のように積極的に支援学校の児童に働き掛け、手をつないで活動をリードしていた。また、その下の写真は、本校の肢体不自由学級の唯一の児童で、教室内で一人で学習する機会が多い。この児童は、誰よりも積極的に一人一人に声を掛け、動作を交えながら自分の好きなことなどを伝えていた。

交流会終了後、七夕の日を前に、支援学校からまた模造紙大の用紙が届いた。七夕飾りである。そこには、児童一人一人が自筆で書いたお礼の短冊がびっしりと並べられていた。本校児童は一枚一枚を読みながら交流会を思い起こしていた。

第2回 平成27年11月25日 9：30～11：30

(於 船岡支援学校 体育館 校舎)

11月5日、支援学校から「招待状」と「児童実態表」が届いた。いずれも様式は第1回の交流会と同様である。また、前回と同じように「招待状」が掲示されると、6年生や特別支援学級はもちろん、他学年の児童たちも見入り、関心や意欲を高めていった。

船岡支援学校を会場とする第2回の交流会も、2部構成である。

- ① 第1部（9：55～11：00 進行：支援学校児童1名 本校6年生1名）
（横倉小学校児童入場）
 - 1 始めのことば
 - 2 あいさつ
 - (1) 支援学校から（含 児童自己紹介）
 - (2) 横倉小学校から
 - 3 全体合唱「君をのせて（天空の城ラピュタ）」
 - 4 支援学校長から
 - 5 横倉小学校長から
 - 6 支援学校児童による学校案内（5つのグループに分かれて）
 - 7 「横小ソーラン」を踊ろう
 - (1) 横倉小学校児童による手本披露
 - (2) 5つのグループに分かれての練習
 - (3) 全員での踊り
- ② 第2部（11：00～11：30 進行：支援学校児童1名 本校6年生1名）
 - 1 横倉小学校6年生の発表
 - 2 感想発表
 - (1) 支援学校（二名）
 - (2) 横倉小学校6年生（一名）
 - (3) 横倉小学校特別支援学級（一名）
 - 3 プレゼント贈呈（支援学校児童から横倉小学校児童へ）（横倉小学校児童退場）



＜第1部
『横小ソーラン』
を踊ろう＞

「こんなふうには腰を
おろしておどるんだよ。」

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

- ・ 支援学校児童のトイレについては、会場である体育館に障害者用のトイレがあり、それに対応できた。また、休養のための教室を一つ用意し、更にケアスペースとして、体育館内についたてを前面に置いてベッドも設置した。
- ・ 支援学校児童の安全確保が気になったが、訪問予定児童18名に対し、引率者は看護師3名を含め21名である。教員移動や活動の際には、児童一人一人に支

援学校の教員が付きっきりで支援に当たっていたので問題はなかった。

- ・ 支援学校児童への接し方に関しても不安だったが、支援学校から事前に届いた「児童実態表」は、安全確保だけでなく指導する上でも大変役立った。

5. 実践事例の実績、実施による効果

- ・ 支援学校の児童は、車椅子に乗っているために動きが制限されたり、障害のためにコミュニケーションがうまくとれなかったりする場合が多い。しかし、毎年、本校児童は、支援学校の児童と顔を合わせており、先述のように、交流会の中でダンスやゲーム等をして楽しんだり、休憩の時に、自然に互いにおしゃべりをし合ったり、本校の児童が車椅子を押しながら体育館内を自由に移動したりするなど深い交流が見られた。

3年生では「船岡支援学校交流実行委員会」を立ち上げ、支援学校児童に手紙を書くことを提案したり、学級紹介やプレゼント作成の準備を進めたりした。交流会では、始めから「〇〇さん、一緒にゲームをしよう。」と親しく名前と呼んで楽しんでいた。支援学校の児童が帰校する際は、児童が乗ったバスが見えなくなるまで手を振っていた。

また、特別支援学級では、特に、この交流会を重視し、例年、年度当初から計画を立て、歌やダンスの練習をするとともに、プレゼント作りにも早くから取り組んでいる。支援学校の児童とは、毎年、交流しているだけに、一人一人をよく覚えており、交流を大変楽しみにしている。

このような様子から、児童は、支援学校との交流を積極的にとらえ、ねらいとしている互いを認め合う態度や共生の態度が十分に育成されていると考える。また、このような経験を通して、障害がある人だけにではなく、ふだんの学校生活の中でも他者を思いやる心や助け合い、認め合い、励まし合いなどの好ましい人間関係の指導をさらに進めようとの思いが教職員の中に広まっている。

6. 実践事例についての評価

- ・ 3年生は、この交流での学習が発展し、市内の特別養護老人ホームへの訪問をしたり、キャップハンディ体験を行ったりするようになった。訪問では、船岡支援学校との交流が生きており、身体の不自由な高齢者に積極的に話しかけたり、体をさすったりしていた。また、キャップハンディ体験では、実際に車椅子に乗り、支援学校の児童が移動する際の苦労も感じたようだった。さらに、今年度の遠足では、宮城県リハビリテーション支援センターでの体験活動も取り入れた。
- ・ このような教育活動の理解を深めるために、支援学校では保護者に参加の案内をしているが、本校ではしたことがなかった。障害がある人との共生社会が進む中、保護者にこのような取組を参観し、障害がある人の人権についての理解を深めることは必要である。今後、前向きに検討したい。
- ・ 2回の交流会では限界がないわけではない。が、回を増やすことも容易ではない。交流会はかなり定着したと感じている。今後は、これまでに踏まえ、障害についての理解を更に深め、人権についてどう啓発していくか、船岡支援学校と連携しながら、その方法について開発を進めていきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

角田市立横倉小学校

肢体不自由の障害がある児童が通う支援学校との交流を38年間にわたって継続的に実施し、心を働かせて他者を理解し、思いやりをもって行動する児童を育成している。交流先の支援学校の児童は、動きが制限されたり、コミュニケーションがうまくとれなかったりするが、児童は毎年顔を合わせているため、交流を積極的にとらえ、自然な形で交流が深まっている。交流実施に当たっては、事前の綿密な打合せなどの調整が重要となる。両校では、人権尊重の視点に立ち、ねらいを明確にした上で、招待状の作成や児童実態表に基づく接し方の事前指導を実施するなど、積極的な連携・協力を行っている。さらに、交流での学習を生かして、特別養護老人ホームの訪問やハンディキャップ体験の実施などへと発展させている児童には、互いを認め合う態度や共生の態度が育ってきており、支援学校との交流をとおして人権教育を実践する事例として参考になる。